

李滂と白堅（補遺）

高田時雄

本誌の前號（創刊號）に「李滂と白堅——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景」という小文を掲載したところ、何人かの方から関連資料についてご教示を得た。また筆者自身も前號には敢えて載せなかったり、刊行後になって気付いたものもあるので、それらを今號の餘白を借りて補足しておきたいと思う。

觀堂遺墨の題簽

王國維が1927年6月2日入水して自死を遂げてのち三年半、1930年12月に至って上海から『觀堂遺墨』二巻が刊行された¹。編者は陳乃乾（1896-1971）、海寧の人で王國維の同郷である。その序に曰く：「北方友生既輯其遺書爲四集、日本博文堂亦印行其遺墨。竊念先生寓滬久、滬上同人得其手蹟最多。題跋考證之作、頗有爲遺書所未採及者。因隨時段印、凡得若干種、輯爲兩卷。」文中に言う遺書四集とは民國十六年から十七年にかけて刊行された『王忠愍公遺書』、後者の日本博文堂印行の遺墨とは昭和三年（1928）に大阪の書肆博文堂原田悟郎が神田喜一郎に依頼して編訂した『王忠愍公遺墨』のことを指している。それらに續いてこの『觀堂遺墨』が上海で出版されたわけだが、その題簽を書いたのが他ならぬ白堅であった（圖1）。圖は書帙上に貼付された原題簽で、「白堅敬署」とあるのがご覧いただけるであろう。ただ白堅の名が記されているのはここだけで、書冊自體の上下巻には「白堅敬署」とあるかわりにそれぞれ「卷之上」「卷之下」とあるのみである。偶々最近入手した同書にこの題簽があることに気付いたので、ここに掲げておく次第である。



圖1: 白堅の題簽

¹正確な刊行時期は不明。いま陳乃乾の序に「民國十九年十二月」とあるのによる。

白堅はこの頃上海フランス租界の辣斐德路 (Route Lafayette) (今日の復興中路) 桃源邨に住み、その寓居を「漢石經石室」と稱していた²。では白堅がこの書に題簽を認めることになった背景はどういうことであろうか。白堅が生前の王國維と面識があったことも大いに考えられるが、それだけではあるまい。編者の陳乃乾との交遊を考えなければ説明は難しい。『清代碑傳文通檢』『室名別號索引』『禁書總録』『四庫全書總目提要索引』など多くの工具書の編纂で有名なこの人物は當時上海にあって大東書局の編輯を勤めながら、持志學院、國民大學の教授を兼ねていた。その陳乃乾に『魏正始石經殘字』二卷の作があることは餘り知られていない。刊記に「癸亥十月海寧慎初堂陳氏從上虞羅氏假本影印」とあるとおり、この書は民國十二年に羅氏の所藏を借りて陳乃乾が影印出版したもので、題簽は傅增湘の手になる。本編の註39で述べたとおり、白堅は石經には竝々ならぬ興味を有し、漢の熹平石經や魏正始石經の殘石を所藏していたばかりか、石經に關する專著の出版もある。またこれも本編で觸れたとおり (14頁、26頁)、1929年の9月 (すなわち『觀堂遺墨』刊行の前年)、白堅は傅增湘父子に同行して日本に行っている。白堅と陳乃乾は石經という趣味を共有するばかりでなく、傅增湘を媒介とする繋がりも推測できる。おそらく彼らは上海で同一の活動圏内にいたものであろう。白堅の行動をうかがう材料の一つになるであろうか。

「四翁樂群圖」中の白堅

同僚の永田知之助教の示教によって「四翁樂群圖」という畫卷に白堅の姿が見えていることを知った。これは昭和五年 (1930) 秋、樂群社の同人が京都は一乗寺の詩仙堂に雅會を催した時の一こまを畫いたもので、筆者は本田成之である³。杉村邦彦教授による詳しい解説が畫卷の寫眞とともに、秋田の内藤湖南先生顯彰會の雜誌『湖南』第五號 (昭和60年1月發行) に掲載されているので、就いてご覧頂きたい。以下、主として杉村教授の紹介文に據って概略を記すことにすると、この繪に樂群社同人の兩山長尾甲、湖南内藤虎次郎、君山狩野直喜、如舟小川琢治の四名が畫かれているのは當然として、それ以外になお三名の人物が見えている。そのうち僧形の人物はおそらく詩仙堂の住持であろうと思われるので除外し、洋

²白堅が民國十九年に刊行した『漢石經殘石集』に「十八年歲次己巳十二月歲除日、西充白堅識于上海桃源邨之漢石經石室」とある。ちなみに民國二十五年刊の『魏正始三體石經五碑殘石記』には「丙子新秋西充白氏與石居印」とあるので、白堅はまた「與石居」という室名も用いていたことがわかるが、こちらのほうは少しく時代が降る。

³落款に「昭和六年秋本田成之敬寫」とあり、繪は一年後の作である。蔭軒本田成之 (1882-1945) は京都大學で狩野直喜に就き經學を修めた人物で、『支那經學史論』『支那近世哲學史話』などの著がある。一方富岡鐵齋に私淑し繪畫を研究、實作者としても定評があった。

服を着た一人と、和服を着た一人が問題となるのだが、そのうちの洋服の人物が實は白堅であると推測される。現在長尾家に所藏されるこの畫卷には、別に松浦嘉三郎の手になる「書四翁樂群圖後」と題する四紙からなる一文が附屬しており、それを讀むとこの日の雅會の様子がよく分かる。いまこの書後の關連する箇所だけを抜き書きしておこう。

…(前略)…去年季秋、輒假座於一乘寺村詩仙堂。堂是寬永年間石川丈山翁之所隱栖、修葺至今、比丘守之。…(中略)…此日四先生早晨已到、論學譚藝、靄々惇々、議論證據古今、旁及草木蟲魚、其淵其博、眞乎有足駭人也。偶有蜀人白君堅甫携坡公禱雨記事詞卷而來。批覽之、洵爲希世之秘珍。四先生賞觀久之、高談轉清、而秉燭不散。…(中略)…會畢、遂請同學本田蔭軒博士、繪寫當日高會之景、以贈守堂者而爲記念焉云。

この書後は末尾に「昭和辛未(1931)季秋霜降之日、攝津松浦嘉書」とあり、本田の繪と同じく雅會の約一年後に作られたものである。松浦嘉三郎(1896-1945)は東亞同文書院を卒業後、北京の順天時報記者を経て、京都大學で内藤湖南に就いて學び、この時草創間もない東方文化學院京都研究所の研究員であった。當時松浦は詩仙堂からは目と鼻の先の一乘寺村下り松に住んでいたこともあり、この雅會の末席に連なったものと推測される⁴。洋服の白堅の傍らで石の上に座した人物が松浦であることは言うまでもない。本田の筆はなかなかの力量で四翁の姿も實によく特徴を捉えている。本編に掲載しておいた蝶ネクタイ姿の白堅の寫眞を見れば、ここに畫かれた洋服の人物が白堅であることは疑いを容れない。

我々は松浦の書後から白堅がこのとき東坡の「禱雨記事詞卷」を持ち込んで來ていたことを知るが、これも必ずや然るべき買い手を求めてのことだったであろう。ただそれが何人の有に歸したかは知られない。ともあれ1930年に白堅が日本に來たという確證はこれまで存在しなかったが、この畫卷によってそれが分かるとともに、先に推測しておいたように白堅がほぼ毎年のように日本に來ていたことが裏付けられる。

白堅致倉石吉川信札

次に紹介するのは、白堅が『尚書正義定本』の寄贈を受けたことに對し、著者の倉石武二郎及び吉川幸次郎二氏に宛てて認めた禮狀である。京都大學人文科學研

⁴筆者は松浦嘉三郎について少し調べたこともあり、別に詳しく紹介する機会を持ちたいと考えている。

究所所蔵。これも永田助教と齋藤智寛助教が、彼らの使っている哲文研究室から発掘したと言って通報してくれたものだが、なかなかの珍物と稱して良いものである（圖2）。

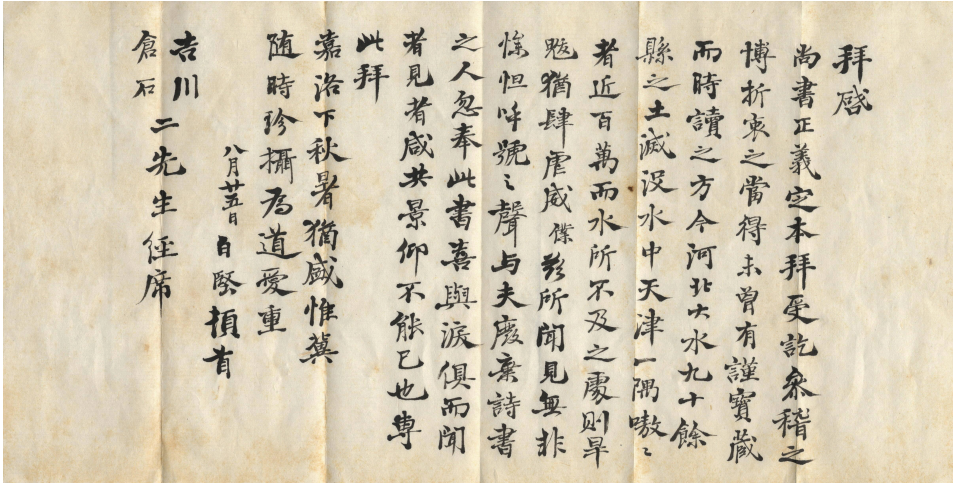


圖 2: 白堅致倉石吉川信札

さして読みにくい文字ではなく、圖版のみでも十分とは思われるが、正確を期するため以下に書簡の文字を書き出しておこう。

拜啓

尚書正義定本拜受訖、參稽之博、折衷之當、得未曾有。謹寶藏而時讀之。方今河北大水、九十餘縣之土滅沒水中、天津一隅嗷々者近百萬、而水所不及之處、則旱魃猶肆虐威。僕茲所聞見無非慘怛呼號之聲、与夫廢棄詩書之人忽奉此書、喜與淚俱而聞者見者咸共景仰不能已也。專此、拜嘉洛下秋暑猶盛、惟冀隨時珍攝爲道、愛重。

八月廿五日 白堅頓首

吉川 二先生經席
倉石

消印は「27.8.28」、おそらく民國28年8月27日である。この年河北で大きな水害があったが、この日付はその事実とよく符合する。また白堅が寄贈を受けた『尚書

正義定本』とは、東方文化學院京都研究所（昭和13年度から東方文化研究所と改稱）經學研究室が十年來繼續してきた『尚書注疏』の校訂作業が一段落し、昭和14年7月25日にその最初の二冊（卷一至卷五）が刊行された。白堅は逸早くその寄贈を受けたのである。本編で見たとおり、白堅はすでに昭和6年（1931）、研究所の紀要『東方學報』の寄贈者リストにも名が見えており、京都の研究所では然るべき待遇をしていたことが想像されたが、この手紙により一層そのことが確かめられる。ちなみに封筒には白堅の住所印が押されており、「北京南池子緞庫普度寺前巷十一號 電話東局三五―」となっている。このとき白堅はすでに北京に居を構えていたことが分かる。

董康致羽田亨信札

中國國家圖書館善本部の史睿氏が同館普通古籍組所藏の「董康信札」中の一通をわざわざ移録して提供された。董康が羽田亨に宛てた書簡である。いまその一部を下に引用する。

…（前略）…因台端著作等身，性復嗜古，疊承垂詢德化劉氏所藏敦煌經卷，具見關心文獻，敦思古之崇情，茲特將詳目開呈玄覽。德化劉氏，即前清學部大臣劉廷琛，爲海內有數藏書家，與李盛鐸爲至親。經卷共八十餘種，大率首尾完善，較諸李氏所藏爲尤精。劉氏在時，曾有人議價五萬元，終以未忍割讓作罷。今劉氏業已物故，家復中落，倘貴國文化機關有意收藏，將與李氏藏經同有得主之幸。劉氏後人聞之，必欣然樂從。弟亦當極力玉成。原價具在，較之李氏藏經爲廉矣。…（後略）…

この書簡から知られることは、(1) 羽田が劉廷琛舊藏の敦煌經卷に關心を持っていたこと、(2) 董康がその目録を羽田に提供したこと、(3) 李盛鐸舊藏寫本と同様に日本の“文化機關”への購入を慫慂していること等である。とくに(3)は重要で、羽田が李盛鐸舊藏敦煌寫本の購入に深く關與したことの間接的な證明となる。

さてこの書簡の末尾には「八月卅日」の日付があるのだが、果たして何年の八月であろうか。書き出しが「文旆東來、爲謀東亞文化精神團結、昌謨宏議、時于尊俎間欣承、雲萍契合、殆有夙由」となっているので、この書簡は羽田が中國で董康と會ったのちに送付されたことを推測させる。羽田は昭和13年（1938）年の8月21日から東亞文化協會發會式に出席のため中國に出張しているが⁵、書簡に言う「爲謀東亞文化精神團結」とは東亞文化協會のことを指しているのに違いない。

⁵『東方文化研究所彙報』第百拾八號（昭和13年8月17日）。

この推測に誤りがなければ、この書簡は同年の秋に書かれたものである。羽田は恐らくその時に董康と会い、劉廷琛舊藏敦煌寫本にも話が及んだのであろう。羽田はこの時期きわめて精力的に敦煌寫本の収集に従事しており、その手になる敦煌寫本の「新增目録」⁶を見れば諸家の所藏が陸續羽田の手に歸している様子を知り得る。李盛鐸の寫本を獲得した羽田が、さらに劉廷琛舊藏寫本に手を伸ばそうとしていたことは極めて自然である。

ちなみに劉廷琛舊藏の敦煌寫本は紆餘曲折を経て、現在中國國家圖書館に歸している。寫本は劉廷琛の死後、先ず縁戚の張子厚の手に渡り、そこから吳甌の購入するところになった。吳甌は戰中、華北臨時政府の内務総署署長の職にあったため、新中國建國後の1952年、敦煌寫本は漢奸の逆産として國家に沒收されたのだという。その経緯は尚林氏の一文に詳しい⁷。結局、劉廷琛舊藏の敦煌寫本は羽田の手には入らなかった。

⁶寫本。羽田は李盛鐸舊藏寫本を獲得した後も引き続き敦煌寫本を集め、それらを逐一この目録中に記録した。

⁷尚林「劉廷琛舊藏敦煌遺書流失考」『漢學研究』第12卷第2期（1994年12月）、345-357頁。